

2014WS 金曜3時間 2学期 題目「哲学的意味論の観点から、問いと推論の関係を分析する」
第11回講義 (201500109)

あけましておめでとうございます。

第1章 問答の観点からの言語行為論

- §1 発語内行為の分類
- §2 質問の発語内行為の特殊性
- §3 言語行為はなぜ成立するのか? (言語行為は、問答の中で成立することを論証したかったのですが、未完です。)

第2章 質問以外の言明は、問いに対する答として成立することの証明 (焦点論からの証明)

- §1 コリングウッド・テーゼの説明
- §2 「焦点」の観点からのCTの証明
- §3 「焦点」の観点からのCTの証明の再説 (先週とは、全く異なる順序で証明をやり直す)

第3章 問答の同一指示テーゼ

- §1 「問いへの答はすべて、同一性発話 (ないし非同源性発話) として理解できる」の証明
- §2 補足疑問発話に関するT1aの証明
- §3 決定疑問に関する証明
- §4 残された問題
- §5 次にすべきこと

第4章 相関質問が異なる時、発話の意味は異なる

第5章 同一性発話の意味論

暫定的提案: 同一性発話の意味を理解すること=両辺の名詞句を理解し、それらの指示対象の同一性を理解すること

- 1 名詞句を理解するとはどういうことか
- 2 同一性発話の両辺の指示対象の同一性を理解すること
 - (1) 同一性発話の区別
 - (2) 同一性記述発話の両辺の指示対象の同一性を知る仕方
 - (3) 同一性宣言発話の両辺の指示対象の同一性を知る仕方

■上記2の(2)の補足

同一性命題の両辺の同一性/非同源性を知る仕方は、次の二つに分けられる。

- (1) 両辺の表現の意味だけに基づく場合 (アプリアリに知る場合)
- (2) 両辺の表現の意味と経験に基づく場合 (アポステリアリに知る場合)

(1)の場合、「 $A=B$ 」が真である/偽であるとわかることは、意味の定義にもとづく。「 $A=B$ 」が定義そのものである場合と、「 $A=B$ 」が意味の定義の命題からの推論に基づく場合がある。意味の定義は、同一性発話になる。例えば、「 $A=C$ 」がAの定義である時、 $A=C$ 、 $C=B$ 、 $\vdash A=B$ という推論によって、「 $A=B$ 」が真であるとわかる。このばあい $C=B$ は定義であるかもしれないし、これも意味だけに基づく推論の結論かもしれない。定義の命題は、宣言する発話なので真理値を持たないが、一旦定義された後では真となる。ゆえに、この推論は理論的推論である。意味に基づく場合は、次の二つに分けられる。

語の意味内容の定義に基づく場合、

「三角形=3つの辺で閉じられた平面図形」

「1メートルの長さ=棒Sの長さ」

(語の意味内容の定義は、同一対象を指示する記述句によって与えられる)

語の意味内容の定義と推論に基づく場合、「 $100-7=93$ 」

(2)の意味と経験にもとづいて、同一性/非同一性が解る場合。

例えば「ヘスペラス=フォスフォラス」が同一であることは、まず、明けの明星を「ヘスペラス」と命名し、宵の明星を「フォスフォラス」と命名することにもとづく。この命名は、「明け明星=ヘスペラス」や「宵の明星=フォスフォラス」という同一性宣言発話によって行われる。しかし、これだけでは、両者の同一性はわからない。これは天体観測にもとづく。天文学者は、観測によって明けの明星と宵の明星の振る舞いにある規則性をみつけ、その規則性を表現する命題から、両者の同一性を推論できることを示した。

「ヘスペラス」の指示対象と「フォスフォラス」の指示対象が同一であることが事実によって解るためには、それぞれの指示対象が、別々の事実として与えられている必要がある。

「ヘスペラス=フォスフォラス」は語の指示対象の定義と観察と推論にもとづく。

(「ヘスペラス」の定義は、最終的には直示による対象の指示である。)

■上記2のまとめ:

<問答における同一性記述発話の理解>

「あなたの車はどれですか」「あの赤い車です」

質問者にとっては、「A=?」

返答者にとっては、「A=?」(問い) ⇒ $[A] \rightarrow O, O \rightarrow [B]$ 、 $[B]$ or $[A=B]$ (答え)

質問者にとっては、「A=?」 ⇒ $[B]$ or $[A=B]$ (答え)、 $[B] \rightarrow O, [A] \rightarrow O$

<問答における同一性宣言発話の理解>

返答者にとっては、「A=?」質問 ⇒ $[A] \rightarrow O, O \leftarrow [B]$ 、 $[B]$ or $[A=B]$ 答え

質問者にとっては、「A=?」質問 ⇒ $[B]$ or $[A=B]$ 答え、 $[B] \rightarrow O, O \leftarrow [A]$ 、 $[A=B]$

<まとめ:暫定提案の修正>

・問答の分析からわかることは、最初に示した暫定提案:

同一性発話の意味を理解すること=両辺の名詞句を理解し、それらの指示対象の同一性を理解することは正しくないということである。もし暫定提案が正しければ、次のような図式になるはずである。

$[A] \rightarrow O1, [B] \rightarrow O2, O1=O2, [A=B]$

しかし、そうはなっていない。問答においては、二つの対象はあらかたわれない。つまり、問答において、両辺の指示対象を理解し、その同一性を確認するというようなことは生じない。補足疑問とその答えとして問答が行われるとき、そこに登場する対象は一つだからである。

修正提案: 同一性発話の意味を理解すること=

一方の表現の指示対象を理解し、それが他方の表現の指示対象であることを主張する

(「あなたの車はどれですか?」「あれです」の場合)

(「ベジマイトはどれですか」「これです」の場合)

あるいは、一方の表現を理解し、その指示対象を他方の表現によって宣言すること。

(「注文はなにですか」「うどんにします」の場合)

以上の分析から、命題行為(指示と述定)が成立した後に、発語内行為(主張、命令、約束、宣言など)が行われるのではないことがわかる。命題行為ないし命題は、問答の結果として成立するものである。命題行為の成立以前に、質問発話において名詞句による対象の指示や、(指示対象が与えられない場合には)名詞句の意味内容の理解が成立している。

問いは、名詞句による意味内容の理解と、その与えられていない指示対象を別の名詞句で記述することを求め

ている。あるいは、問いは、名詞句による意味内容の理解と、その与えられていない指示対象を別の名詞句で決定することを求めている。

第6章 述定と発語内行為 (テーゼにして、厳密に証明することができていません)

1 述定と発語内行為の結合

「あなたの車=どれ?」の場合、これはすでに返答が記述になることを指定している。返答が与えるのは指示だけである。「あなたの注文=なに?」の場合、これはすでに返答が宣言になることを指定している。返答が与えるのは指示だけである。問いは、一つの(完全なあるいは不完全な)指示と、同一性関係の記述あるいは宣言の依頼からなる。命題行為が完了する前に、すでに発語内行為が行われている。発語内行為は述定と結合している。

■事例

「私は(他でもなく)明日の会議に出席することを約束します」

(「私が出席することを約束するもの=明日の会議」)

この同一性「=」は、同一性の宣言である。そしてこれが宣言となることは、質問において示されている。

たとえば、これが次のような質問への返答であるとき、

「あなたはどれに出席を約束してくれるのですか?」

(「あなたが出席を約束してくれるもの=どれ?」)

この質問はすでに返答の「=」が記述ではなくて、宣言になることを指定している。

■サールによる類似の指摘

(『言語行為』の「第5章 述定」の「6 述定は言語行為か」より)

「さて、述定という言語行為の本性はなにだろうか。」(p.122, 邦訳 219)

「述定という行為は、指示やさまざまな発語内行為が言語行為であるというときのきわめて重要な意味においては、分離された独立的な言語行為ではない」(p.122)

“You are going to leave”

“Leave!”

“Will you leave?”

“I suggest that you to leave”

これらにおいて、「あなた」について「立ち去る」が述定されている。

F (R(you), P(leave))

しかしここで“F”と“leave”のあいだには、“F”と“you”の間には無い、関係が成立している。

「異なる発語内力表示部分(force indicating devices)は、いわば「立ち去る」が君に関して述定される様式(mode)を決定している」(p.122、訳 220)

「すなわち、Fの項は、述語の項に作用して、その述語が指示表現によって指示された対象に関係する際の様式を決定する。この文が、疑問文であるならば、その疑問的な性格(interrogative character)(Fの項)が、その発話の力は主語(Rの項)によって指示された対象に関して述語(Pの項)が真であるか否かを質問することであるということを決定する。あるいはまた、その文が命令文であるならば、命令法の発語内的力表示方策(Fの項)が、Rの項によって指示された対象がPの項によって特定化された行為をなすということを決定する。その他の例に関しても同様である。」(p.122、訳 220)

「この分析によるならば、発語内的力表示方策が中立的な述語表現に作用して、その主語表現によって指示された対象に関して、その述語表現の真理についての疑問(question)が提起される様式(mode)を決定することになる。」(p.122、訳 220)

「これに対して、Fの項は、Rの項の機能に影響を与えないということに注目したい。Rの項の機能は、きわめて当然のことながら、つねに同定を行なうということである。このような対比は、指示は発語内の力に中立的に生起するが、述定は中立的であることはなく、つねに何らかの発語内の様式において生起するという述べ方によ

って表現することも可能である。・・・指示は、分離した独立の言語行為であるが、述定は、分離した独立行為ではなくて、発語内行為の一局面(slice)である。」(p.123、訳 221)

2 述定+発語内行為の分類について

全ての発語を同一性発話に言い換えられるとすると、述定は同一性「＝」と非同源性「≠」の二種類だけになり、それぞれが結合する発語内行為は記述と宣言の二種類だけになる。

このとき、命令、約束、表現、宣言の区別は、名詞句の中で示されることになる。

非遂行文発話

- 「オバマ＝現在のアメリカ大統領」
- 「私があなたにあげるもの＝x」
- 「あなたがこれからすべきこと＝x」
- 「おめでたいこと＝x」
- 「被告の罪＝無罪」

遂行文発話の場合

- 「私が・・・と主張すること＝x」
- 「私が・・・と約束すること＝x」
- 「私が・・・と命令すること＝x」
- 「私が・・・と思うこと＝x」
- 「私が・・・と宣言すること＝x」

2014WSのFinal Report について

最終レポート について	2014年度第2学期 文学部「哲学講義」大学院「存在論講義」 題目「哲学的意味論の観点から、問いと推論の関係を分析する」
テーマと形式:	講義内容に関係したテーマを自由に設定してください。 (例えば、講義で言及した文献を読み、その一部を紹介し分析する。) ・必ず内容を正確に表現するタイトルをつけてください。 ・もし可能ならば次の形式にしてください。 形式 : 問題 問題の説明 答え 答えの証明
分量	4000字程度 (英語の場合、ca.1800 words)
用紙	ワープロ原稿横書き、A4、和文の場合 40 字 30 行、(英語の場合、12pt. New Times Roman) 上下左右のマージン 20-25mm
締め切り	卒業生修了生は、 2015年2月12日午後5時締切 最終学年以外の成績締切 2月19日午後5時締切
提出場所	文学部玄関「入江」のメールアドレス(郵送可、大阪大学文学部入江幸男宛て) e-mail で送るのはやめてください。

